【タイトル】温泉の神様

【著者名（ペンネーム）】梅春

【本文】

吸って吸ってすってすって、、、地中から熱い湯を吸い上げて、吸い上げて、、、

「はあーっ！」

ってな感じで地上に噴き出す。

毎日毎日この繰り返し。

でも、噴き出すときの快感は変わらない。

繰り返し繰り返し、この繰り返しがほんとに気持ちよい。

俺は長に与えられた役目を最初は恨んだ。

しかし、いまは感謝をしている。天職とはこのことだと思う。この役目を全うしたい。

俺は繰り返し繰り返し吐き出すことを楽しめる。

仲間が飽きないのかとか、馬鹿なのかと笑っていたことがやめられなかったのだ。

俺はバカだが、役目を果たさないような愚か者ではない。

意外に律儀なのだ。

だから、地上で放った種の行く末も秘かに見守っている。

そんな俺のまともな部分を、知る仲間は誰もいない。

俺は神族なのに、放蕩を繰り返した。地上に降り、娘たちを孕ませたのだ。繰り返し、繰り返し、飽きもせず。

神族の長は注意を繰り返し、それでも愚行を止めない俺に怒り、こう言った。

「そんなに気持ちいいことが好きなら、おまえに地中の神の役目をやろう」

「え？　地中の神」

俺が問うと、長は意地悪く笑った。そして、俺の額に中指を立て、真面目な顔に戻って言った。

「きれいな顔のおまえを地中に沈めるのは忍

びないが、、、おまえの求める快感は得られるぞ。幾度となく、幾度となく、それは飽きるほど無限におまえを包むだろう」

「それはいったい・・・」

長がつんと額を突くと、俺は勢いよく後ろに倒れた。

それからの記憶はない。

気づけば、地中の中ふかく深く、そこは暗い泥と闇と果てしの無い湿気に包まれた世界だった。

生温かく心地良いような、少し息苦しいような空気に慣れると、足元に溜まった熱い湯が不気味に体を這い上がってきた。

このままでは湯に飲み込まれてしまう。

逃げ出したほどの熱い湯が腹回りを包んだとき、焦りのあまり思わず大きく息を吸った。

すると、皮膚を通して湯が体を満たした。

「え？」

放ちたい・・・娘たちを組みしだいていたときと同じ感情が俺を包んだ。

全身が棒のように硬くなり、湯で満たされていく。どんどんどんどん体が膨張していく。

「ふ、ふくらんでいく」

体がみちみちに満ち、苦しいほどに膨張していく。たまらなくなって今度は大きく息をはくと、全身を貫通するような鋭い衝撃が走った。

「あっ」

思わず声が漏れる。この感じは・・・

娘たちを次々と孕ませていた夜と同じ快感が体を突き抜けた。

気づけばクジラのように頭頂から地上に湯を放っていた。

湯は温度を高め、ぐんぐんと地中を登っていく。

地の割れ目が見えた。そこを覗き込んでいるのは、何人もいる我が子のうちの一人だった。

硬い土の割れ目に紅葉のような手のひらを突っ込み覗き込んでいた男児の額に飛び出し

ていく。

小さく、それでいて広くしっかりと張り出した額（それはこの童が確かに自分の分身だと感じさせた）に鋭い一筋の湯を受け、男児は驚いて尻餅をついた。

その様子は、長に地中に沈められた瞬間を思い出させた。

そばにいた子供の母親が驚いて膝をつく。

「あらあら、どうしたの？」

笑いながら男児を立たせる。

おそらく昔この手に一度は抱いたであろう村の女が噴き出し続ける湯筋を見て、目を丸めた。

「こりゃ温泉だ。すごいね。すごいよお」

女が子供に微笑む。

小さな男の子は誇らしげに母に笑って見せ、熱い湯のその形を確かめようとするように、噴き出す湯を掴もうと何度も手の平を閉じたり広げたりしている。

ああ、かわいい紅葉が湯に濡れながら、開

いたり閉じたりしている。

初めて自分の息子をかわいいと思った。

きゃっきゃと笑う息子を眺めながら、そんなふうに自分に与えられた役目を理解したのだった。

地中の湯を汲みだす神、、、それも悪くない。

長が言う通り、俺はこの感覚が大好きだ。

中毒だと言っていい。だから、これを仕事にできたのはラッキーだった。決して罪ではない。今なら長を抱きしめて、その厳めしい顔に口づけの雨を降らしてやりたいほどだ。

長は娘たちのように恍惚の表情を浮かべることはないだろうが。

それに“これ”をこれだけ繰り返せるのも俺だからだし・・・まさに天職。そう思っていたんだ。

でも、仕事はそんなに甘くない。

俺も老いてきた。汲んで汲んで、吸って吸って、体を硬くして思いっきり地上に吐き出

す。

人間たちが地上を掘ったり、何かで固めたり、無数の杭を打ち細長いものを立てたりするせいか、足元を浸す湯の量も少なくなってきた。

前は何もしなくてもすぐに腰を、胸を浸してきたのに、今は膝を隠すのが精いっぱいだ。だから吸い上げる力が必要になる。

湯量が少ないから、吐き出す力もそれだけ強くなければならない。

同じことをするのに、二倍の力が必要になる。しかし、俺の体は力を失っていくばかり。いつまでこの役目を果たせるか。

体を突き抜ける快感も、どこかぼんやりしてきて、昔ほどの鋭さがない。

俺もそろそろ引退かもしれない。

俺を地中に沈めた長はとっくの昔に引退し、新しい長が神族を治めている。

新しい族長はいつ目の前に現れるのか。

もう十分に働いた俺はひそかに彼の出現を

心待ちにしていた。

それにしても、湯につかりに来る人間たちの様子もすっかり変わってしまった。

髪や瞳の色が鮮やかな体の大きな異国の民が増えたし、昔から通ってくる肥後の国の男たちは体中の毛を抜いたり剃ったりすることに必死だ。

大の大人なのに、赤子のように頭髪以外の体毛のない男もかなり増えた。

昔だったら、恥ずかしくて人前に出れなかっただろうに、なぜかその体を誇らしげに皆の前で晒しているのだ。

いったい地上では何が起こっているのだ。

仕事を離れたら、地上に飛び出し何が起こっているのか確認していきたい。

そして、この世に放った俺の無数の「種」の行く末を知りたい。初仕事を額に受けた童はまだ生きているだろうか。

痺れるような体の感覚が薄れるにつれ、そんな思いが強くなっていく。

この感覚は、気持ちは何なのだろう？　何と呼ばれるものだろう？

それも地上に出れば名前のつくものなのだろうか。

それを知っていくのが楽しみだ。暗い地中に閉じ込められ、同じことを繰り返していたせいで、俺の好奇心は若いころのまま凍結された。

それを解き放つ。仕事を離れることが許されたとき。

そのときまで、繰り返し、吸っては吐き、吸っては吐き・・・忙しくも誇らしい我が毎日は続くのだ。

そのときまで、続くのだ。

（了）